

## (日本)物理学会への直言状-1.

2023/9/13,16.17

- \* 滅亡を防いでこそ智の価値がある。.....韓非子
- \* 沈黙を守る者は有罪を認めた者である。- イタリアのことわざ -
- \* 直接会って話すのが、お互いの悪感情を一掃する最良の方法である。- エイブラハム・リンカーン -
- \* 真実を語ろう。その結果どんな結末を迎えようとも。- エレン・グラスゴー -

### 不都合な世の中を変える技術.

2023/09/02

[http://777true.net/How-to-Fight-against-the-Absurdity\\_Let\\_s-Unite.pdf](http://777true.net/How-to-Fight-against-the-Absurdity_Let_s-Unite.pdf)

必須重大知見記載、ぜひ一読を、

科学≡真理が従来伝統常識、だがこの事情は1980年代頃から変質、特に気候変動が取りざたされる1990代、James P. Kennett等の複数回古代史メタン大絶滅発見後、それが現代北極で可能性が指摘されるが既に氷層減少は正帰還、聖書、北欧神話予言が如実になった。救済手段～地球工学はあるのだが超権力保守派が断固隠蔽政策、**科学医学学会は異常歪曲時代に**。神聖文書＝聖書コラシム教予言の、世界は末法時代に、

### (1)高度経済成長-高学歴化社会の隠れ脆弱化(退廃工学、退廃科学)。

(a)戦後時代は衣食住と電球ラジオ程度の素朴欲求の原理原点に近い基礎技術生活。

貧しかったので他人苦勞が判り、高慢がなく相互扶助精神、自由と野心があった。

(b)上記の**否定命題**だが高成長高学歴時代は原理原点から遠離、欲張り究極結果は**高慢虚飾退廃時代**に。やりすぎ結果の基礎生存環境破壊の致命的究極誤謬を**高慢**から認知拒否、**事実認否拒否結果は破滅**へ。

貧で他人苦勞認識、飾りなく親密相互扶助、自由と権力抵抗心、野心があった。←**否定命題**  
貧の生活は底を知るので落ちる怖さがない、  
富裕は垣根高く高慢弱者見下し、他方で権力権威には盲従、→ **破滅世代**  
高の生活は底落ちを恐怖する。弱み、悪行誘因の欠陥になる

(c)上記(b)結果は生存直結である(a)の生活破壊。←**逆さま世界!!!**

(d)神を正義真実博愛とすれば論理逆転は不正虚偽憎悪＝反神の悪魔世界！

### (e)宗教は本物です！！

無から有を生成<真空偏極反応>の物理真空世界は論理矛盾世界、論理学定理として全命題が定理(真)<なんでもありの無法則世界(無神論)。全知全能世界(有神論)>

<http://www.777true.net/Proof-on-God.pdf>

<http://www.777true.net/Scientifical-Mechanism-of-Prophecy-by-Paranormalities.pdf>

超常現象-預言者証明の完全性には疑義もあろうが、大筋としてこのメカニズム(分身存在＝意識移転幽体離脱)以外にならう。死後世界帰還者の証言にも合致します。

### (2)物理学会の緊急事業。

強い者は理想を、普通の人には事件を、弱い者は人物を語る、.....ソクラテス

結論は私物要求に見えるが鈴木人格には無関係、その仕事効用だけ。

(a)量子重力力学<素粒子統一場理論>は Einstein 等価原理を基礎に完成してる。

素粒子論は完成しており、真実隠ぺいで不毛不正公金研究は犯罪です。

3個事実認否で決着、物理学が判る必要はないが、意味解釈は素人にも解説できます。

**I**、素粒子論は波動場の力学理論、力学は作用関数と言う概念一個から原理上、全決定。

ニュートン力学は力＝質量×加速度の一個の運動式、天体運動からビル地震動迄、

※作用関数はサイン支出に同じ、人は**最小支払いの原理**で行動する<運動力学決定>

**II**、全物質共有(統一力)の重力場は一般ゲージ場と言われる概念になる<1956 内山龍雄、1993年春に鈴木修正で最終証明>、1993年秋に1兆2000億円米国素粒子実験施設<SSC>が建設半ばで中止。証明は純計算結果で、論文審査でも誤計算指摘はない、

**III**、一般ゲージ場素粒子論化＝量子化法は既に完成してる<1967,L.E.Faddeev & V.N.Popov>

これにより統一素粒子論＝量子重力作用関数が完成<1993～1995>。

理論の試運転の結果、宇宙創始力学と物質進化、素粒子質量公式<SSCの目的>、巨視的万有引力、の現実整合結果が得られてる。

<http://www.777true.net/img008-Quick-Guide-to-Quantum-Gravitational-Dynamics.pdf>

(b)従来の量子力学不備一層の量子確率過程力学が創始されてる・

第一原理からの非平衡統計力学<量子確率過程力学 QSD>。

[http://777true.net/Quantum-Stochastic-Mechanics\\_QSM\\_the-Hidden.pdf](http://777true.net/Quantum-Stochastic-Mechanics_QSM_the-Hidden.pdf)

統計力学復習。

[http://777true.net/Statistical-Mechanics-the-Summary\\_1.pdf](http://777true.net/Statistical-Mechanics-the-Summary_1.pdf)

帳簿変数が経済回路網動作を語る。

<http://www.777true.net/Quick-Guide-to-Economy-Network-Dynamics.pdf>

(c)宗教は本物です！！

無から有を生成<真空偏極反応>の物理真空世界は論理矛盾世界、論理学定理として全命題が定理(真)<なんでもありの無法則世界(無神論)。全知全能世界(有神論)>

<http://www.777true.net/Proof-on-God.pdf>

<http://www.777true.net/Scientifical-Mechanism-of-Prophecy-by-Paranormalities.pdf>

超常現象-預言者証明の完全性には疑義もあろうが、大筋としてこのメカニズム(分身存在＝意識移転幽体離脱)以外になかろう。死後世界帰還者の証言にも合致します。

(3)非会員鈴木を秋季年時学会(東北大 9/16 ～19)に臨時招請証言させるべし。

会員方々と質疑応答機会を切望します。長期経済封鎖結果、破産に直面、会員は責任者、支援カンパしてください。ないといかれないです。口座破産します。

カンパ先: 郵貯店番号 028, 普通預金口座番号 5018540、名前スズキ モトジ

B Wave Technology Workshop、 president Motoji Suzuki

〒239-0813, Kamoi, Yokosuka city, Kanagawa, Japan

神奈川県横須賀市鴨居1-2-5 鈴木基司。

TEL 046-894-8118

[vk9ec5@bma.biglobe.ne.jp](mailto:vk9ec5@bma.biglobe.ne.jp)

<http://www.777true.net/>

## 付録1:素粒子論完成の背景一般解説?

II、全物質共有(統一力)の重力場は一般ゲージ場と言われる概念になる<1956 内山龍雄、1993年春に鈴木修正で最終証明>,1993年秋に1兆2000億円米国素粒子実験施設<SSC>が建設半ばで中止。証明は純計算結果で、論文審査でも誤計算指摘はない、

\*ゲージ=尺度、この単位種類で長さ関係の命題真偽に影響なし、ゲージ不変原理。尺度の変動で物理法則が不変の為には力発生が起こる。統一力理論。

**力のない一様等速度な運動系では空間尺度が何処も等質、その対偶命題は力がある運動系では空間尺度は一様(定数)でない。**

III、一般ゲージ場素粒子論化=量子化法は既に完成してる<1967,L.E.Faddeev & V.N.Popov>これにより統一素粒子論=量子重力作用関数が完成<1993~1995>。

\*量子化=正準共役原理。

<http://777true.net/anyone-can-insight-deepest-matter-world-by-least-Logic&Math-with-easy-translation.pdf>

空間一様ならば手掛かり(観測対象不在)なしで空に等しい。その対偶命題は空無でなければ空間は非一様で観測対象が見える、時空変数変動に対しての観測可能な対象がある、それは時空座標微分に対応する変化量、時空変数と微分演算子には数学自明な交換関係が成立、物理にするには古典力学概念(時空変数と次の結果の**運動量エネルギー**)が必要で交換関係を**断熱不変量**にするには両者積が**作用次元**でなければならない。

その結果が**正準交換関係代数<量子代数>**。←

\*結果こじつけ臭い?、誰かより原理方法を!、不変性議論だから、断熱不変量は自然ではないでしょうか??

特殊相対論変数を用いると**正準交換関係**から\_Schroedinger 方程式の抽象一般導出が成立、スカラーゲージ場  $A^0$ <古典電磁気力学で不在>の正準共役変数を内山は  $B^a$ <双極子密度場>を導入した。この  $B^a$  場方程式がゲ<sup>^</sup>変換不変の為に Faddeev-Popov お化け項の部分作用関数が出現、その証明には S 方程式解の Feymann 経路積分使用。これで Faddeev-Popov は一般ゲ<sup>^</sup>場量子化の基礎を導出した。

<http://777true.net/General-Gauge-Principle.pdf>

総じて全部、**正準共役原理**の一個で量子化が成立してる。

<http://777true.net/anyone-can-insight-deepest-matter-world-by-least-Logic&Math-with-easy-translation.pdf>

付録 2; 最精密な自然記述 = 量子論理と量子力学数学表現。

科学とは了解可能{=論理=既に日常常識中に存在する真命題}と認識。

だから日常認識から物理法則が出てきても不思議はない事になる<論理学至上主義>。

以下例から筆者も論理学至上主義になった。同時に科学を低価格で民衆化する。

最精密な自然記述となれば A or B の様な曖昧さ<重なり>がない確定命題、  
この命題構造は関数空間のベクトルと射影子に対応する<Birkov-Neumann の量子論理>  
重なりがない観測対象要素集合=状態の典型は直交ベクトル群 =  $\{|s_k\rangle; k=0,1,2,\dots\}$ 、  
 $\delta_{jk} = \langle s_j | s_k \rangle$  観測(操作)値は射影子 ~ 自己共役演算子 **S** とその固有値  $s_a = \sum_k \{s_k \langle s_k | \} |s_a\rangle$ 、  
 $S = \sum_k \{s_k | s_k \rangle \langle s_k | \} \rightarrow s_a = \langle s_a | S | s_a \rangle$ 。

関数空間のベクトル = 量子状態と観測量 = 自己共役演算子と言う量子力学数学表現が成立。

この量子力学認識論は今勃興の AI 認識論と同値等価です、認識論は一つ。

<http://777true.net/anyone-can-insight-deepest-matter-world-by-least-Logic&Math-with-easy-translation.pdf>

\*数学体系は恒真命題集合。然るに真命題とは量子論理立場で観測可能性！

したがって一見、抽象数学が後に物理現象に出現する頻繁例は不思議が無い事になる。

付録 3; **不完全性定理の真意** $\{0 = 1/\infty\}$ 、

<http://www.777true.net/Goedel-Chaos.pdf>

自然数集合の最大値 $\infty$ は決定不能、なれば上記算術の実数0も不完全性が成立！

ここに実は点素粒子論 = 標準理論正当性の救済点がある。

無にして無にあらずの不完全性！！

湯川先生も**素粒子点特異性**が納得できず、大きさのある模型を提言するが実現しなかった。

標準理論に置ける**素粒子反応確率振幅**は場の演算子  $\{ \phi(x), A^a_\mu(x) \}$  積になる。

$\langle f | \mathcal{E}_{QCD}^1 | i \rangle = \langle f | \overline{gch} \phi \gamma^\mu A^a_\mu Q_a \phi | i \rangle$ 。

場演算子交換関係の右辺は  $\delta$  関数 = Satoh 超関数、

時空変数  $x$  **特異点共有の超関数である場の演算子積は定義できない**<中西、場の量子論>、

だが幸いにも確率計算はできる、非決定論 = **確率統計論**とは情報喪失が存在、

それは不完全性に由来する。その不完全性は正当必然と言う事だ。

実際に実験でも確率性が観測されてる、標準理論に不備はない。

素粒子多次反応は量子確率過程になる。

[http://777true.net/Quantum-Stochastic-Mechanics\\_QSM\\_the-Hidden.pdf](http://777true.net/Quantum-Stochastic-Mechanics_QSM_the-Hidden.pdf)

<http://www.777true.net/img007-Quick-Guide-to-Quantum-Stochastic-Mechanics.pdf>

#### 付録 4: 素粒子完成で研究転向の研究者(1993年~).

(1)元京都大学物理学科<素粒子論> 河合光教授.

数年前に電話会談、宇宙創始力学の発端初期負エネルギー発生の反エルミト場に言及、彼は非転向と思うが、近年の学会標準テンソル記法では導出不可能な反エルミト場、古典ミンコフスキ記法( $x_0=ict, x_1, x_2, \dots, x_{11}$ )を鈴木は採用、その結果、虚数の反エルミト場が出現、初期出現後に消滅運命、横波成分ながら負エネルギーを担う、以下はその定義詳細。

- ① **Field Variables in QD**:  $\langle \mathbb{F} : x_\mu \equiv (x_0 \equiv ict, x_1, x_2, \dots, x_N) ; A^*_\mu \equiv (A_0 \equiv i\phi^*/c, A^*_1, A^*_2, \dots, A^*_N) \rangle$ .  
(1) LGT  $\equiv$  parallel shifting :  $\psi_A(x+\Delta x) \simeq \psi_A(x) + \epsilon_a(x) G^{*AB} \psi_B(x) = \psi_A(x_\mu) + \Delta x_\mu A^*_\mu(x) G^{*AB} \psi_B(x)$ .  
LGT results invariant physics, so it is interpreted as parallel shifting.  $\epsilon_a(x)$  is infinitesimal function so as to be  $\Delta x_\mu A^*_\mu(x)$ .  
(2)  $D_\mu \psi_A \equiv \lim_{\Delta x_\mu \rightarrow 0} \Delta x_\mu^{-1} [\psi_A(x_\mu + \Delta x_\mu) - \psi_A(x_\mu)] \simeq \partial_\mu \psi_A(x) - A^*_\mu(x) G^{*AB} \psi_B(x)$ .  $\rightarrow$  (3)  $A^*_\mu = \partial_\mu \epsilon_a$ .  
(4)  $dx'_\alpha = [\delta_{\alpha\beta} + \epsilon_{\alpha\beta}(x)] dx_\beta$ .  $\rightarrow$  (5)  $A^{\alpha\beta}_\mu = \partial_\mu \epsilon_{\alpha\beta}(x) = \{\partial_\mu \epsilon_{0k} \equiv iG^{0k}_\mu \text{ (anti hermite)} ; \partial_\mu \epsilon_{ki} \equiv R^{ki}_\mu \text{ (hermite)}\}$ .

<http://www.777true.net/img008-Quick-Guide-to-Quantum-Gravitational-Dynamics.pdf>

通常はスカラ成分が負エネルギー、SO(11,1)だけの特異事項、この結果、この成分を含む部分代数成分が初期投資役割完了後、不安定消滅してSO(11,1)→SO(11); 初期 BigBang 相転移が実現、一般 C 数化 gauge 場の動力学は多変数非線形で解析的な一般解動向を得るのは不可能、幸い筆者は Dalambert 方程式になる事に注目、質量項の正負が生存 or 消滅の安定性基準を与える。この判別式で色 a 対称性を仮定して変数縮約で計算した。P4/5.

$\{A^*_\mu\}$  field equations :  $a = (\mu, \nu)$  量子重力は時空座標二重添え字.

$$[\square - g^2 (f_a^c{}_b A^b{}_v)^2] A^*_\mu \equiv J^*_\mu = \eta g c \hbar \bar{\psi} \gamma_\mu Q_a \psi + g f_b^a{}_c \partial_\nu (A^b{}_\mu A^c{}_v) + g^2 f_a^c{}_b A^b{}_v (\partial_\mu A^c{}_v - \partial_\nu A^c{}_\mu) + g^2 f_a^c{}_b A^b{}_v (f_{d \neq a}{}^c{}_e A^d{}_e A^e{}_v) + (i c \eta - \alpha / i c) \partial_\mu B^a + \eta \chi g f_a^c{}_b C^b \partial_\mu \bar{C}^c.$$

\* (鈴木補足) 借金=-E で創業開始、次第に物資生産収入=+E を上げ”借金相殺”の0=+E-Eの無からのエネルギー保存法則で宇宙創始。実経済でも借金総額=債権総額の金融Oサム定理が成立<経済教科書に記載がない>。初期負エネルギーを担う反エルミト場は非可観測量、不確定性原理極短時間内のみでの存在、後に物質創成に付随発生の重力引力が負エネルギーを担う。これは筆者が導入、現在の宇宙も0=+E-E.

(2)元都立大学物理学科<量子重力→物理数学> 斎藤暁教授

鈴木の理論開発 1993 後に素粒子論を廃業、本人の語る所では物理数学へ転業、筆者理論は非常に難しいとお笑い逆言で称賛いただきました。

(3)元京都大学数理科学研究所<元素粒子論→統計力学> 小嶋泉教授.

6000万円民事裁判元被告人の九後汰一教授の元共同研究者、被告の理論開発 1993 後に素粒子論を廃業、統計力学<化学-薬学部必須科目>分野に転向、医学部出身の異色人、  
\*(被告人補足)被告人初期業務は素粒子論とは真逆の分子多数集合の巨視的物質研究の統計力学<量子確率過程力学~巨視的物質の時間変化理論の創業>、だがこれも公刊停止、彼は量子確率過程力学も知ってる。



元東大物理学科鈴木増雄教授<統計力学>も同様、学会講演写真も撮って頂きました。  
元東京理科大学物理学科北原和夫教授<統計力学>も同様、だが彼は量子確率過程力学論文審査不正に関与<1987 初期には未完部分あり、だが 1990 年、時間問題結論>  
今日まで学会公刊がない(量子重力同様に損害賠償訴訟が必要)。

統計力学専門家は同時に素粒子論と共通基礎の場の量子論も利用、それで本件核心の  
(Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ)判定ができます、他方で素粒子論実験分野でノベル賞受賞者の東京大学小柴昌俊教授(2002 ニュートリノ観測)東京大学梶田隆章教授(2015 ニュートリノ振動)の両名と面談、ともに理論は判らないで支援を拒絶されてます。従来ニュートリノ素粒子質量は0とされてたが鈴木素粒子質量公式(1995)で0は許容されない。1995年以後の日本人素粒子ノベル賞受賞者は5名にもなる。

(4)元京都大学物理学科<重力理論→宇宙核物理>佐藤文隆教授  
重力理論の大家、過去京都大学訪問時に丸後汰一教授のお勧めで会談経験あり、

(5)京都産業大学物理学科は素粒子講座廃止。  
増川久後両教授在籍時に素粒子研究不正で告発してます。  
私学は経営上、公立の様なズサン経営ができない。  
<http://www.777true.net/Kyoto-Sangyo-U-2021-10-26-1136.eml>

一般に長年経験の専門分野を廃業、他分野転向には強い原因動機があります。

付録 5;量子確率過程力学 QSD 補足.

第一原理からの非平衡統計力学<量子確率過程力学 QSD>.

[http://777true.net/Quantum-Stochastic-Mechanics\\_QSM\\_the-Hidden.pdf](http://777true.net/Quantum-Stochastic-Mechanics_QSM_the-Hidden.pdf)

上記の総合論文の熟読を期待します。上記開発期間 1996~1990、以後放置状態。

以下は 33 年後 2023 で浮かぶ事項の記載です。

(1)同等の力学構造を有する複数系を統計集団、個々を標本(過程)と定義する。

理論は統計集団記述、解析は標本過程の基礎認識にはじまる、

(2)標本状態は自己共役 Hamiltonian= $H_0$ と可換物理量(MO)の良い量子数で指定。

(3) $H_0$ 下では状態遷移がない、良い量子状態は一意(非重畳状態)。 $\Delta E=0, \Delta t=\infty,$

\*\*Prigogine,Ilya (1980). From Being To Becoming. Freeman. ISBN 0-7167-1107-9.

1990 学会遭遇の故有光俊彦氏も同意してました。

(4)時間発展<素過程状態遷移>には非自己共役  $H_S(t)$  が不可避、 $\Delta t=0, \Delta E=\infty,$

定義上非可観、有限時間持続は許容不可、→電子雲瞬間遷移(Frank-Condon 原理)

\*\*QED 反応 Hamiltonian 密度は場演算子の積、超関数積は特異点非解析的→遷移確率

(5)上記(3)(4)統合結果は量子過程は Markov 確率過程、Master 方程式が存在

$$d\omega_j(t)/dt = \sum_k \Gamma_{jk}(t)\omega_k(t) - \sum_k \Gamma_{kj}(t)\omega_j(t) \dots \dots \text{確率流入出保存恒等式}$$

(6)遷移行列  $\Gamma_{jk}(t) = \Theta(t)T_{jk} \dots \dots \Theta(t) = \text{単位時間の一次反応(状態遷移)発生率}$

$$(7) \text{一次反応確率: } T_{jk} = | \langle f | \int_0^{\Delta t} dt H_S(t) | / i\hbar | i \rangle |^2.$$

(8)  $\Theta = 1/\Delta t = \Delta E/\hbar$ : 反応生成速度と時間エネルギーの不確定性関係

一般に系の揺らぎ大きさ  $\Delta E$  と反応速度  $(1/\Delta t)$  は比例関係、実はそれがある意味で数学関係<相関関数と電力スペクトラム、Winer-Khinchin 定理>. 冒頭記事引用結果は以下、

$$\begin{aligned}
(\square T)^{-1} \int T(t) du \langle \Psi(u) \rangle | \Psi(\Delta u + u) \rangle &\equiv \Upsilon(\Delta u; t) = \int_{-\infty}^{\infty} d\varepsilon \exp(-\varepsilon \Delta u / i\hbar) \omega(\varepsilon; t) \\
&= \int_{-\infty}^{\infty} d\varepsilon \omega(\varepsilon; t) [1 - i\varepsilon \Delta u / \hbar - \varepsilon^2 \Delta u^2 / \hbar^2 / 2 + \dots] = 1 + i \langle \varepsilon \rangle \Delta u / \hbar - \langle \varepsilon^2 \rangle (\Delta u / \hbar)^2 / 2 + \dots \\
* | \Upsilon |^2 &= \langle 1 - \langle \varepsilon^2 \rangle (\Delta u / \hbar)^2 / 2 \rangle^2 + \langle \varepsilon \rangle^2 \Delta u^2 / \hbar^2 \\
&= 1 - \langle \varepsilon^2 \rangle (\Delta u / \hbar)^2 + \langle \varepsilon \rangle^2 \Delta u^2 / \hbar^2 + [ \langle \varepsilon^2 \rangle (\Delta u / \hbar)^2 / 2 \rangle^2 \\
| \Upsilon(\Delta u; t) | &= [1 - (\Delta u / \hbar)^2 \langle \varepsilon^2 \rangle - \langle \varepsilon \rangle^2]^{1/2} + \dots = [1 - (\Delta u \Delta \varepsilon / \hbar)^2]^{1/2} + \dots
\end{aligned}$$

展開の高次項無視が成立、更に  $0 = [1 - (\Delta u \Delta \varepsilon / \hbar)^2]^{1/2}$  ならば(8)が成立!

$\langle \Psi(u) \rangle | \Psi(\Delta u + u) \rangle = 0$  の状態遷移が成立。

(9)展開の高次項無視が成立??、皆様にお預けします。

(10)  $\Delta t \Delta E = \hbar$ : 作用次元良しだが右辺のスケール  $\hbar$  には意味定義問題がある?

(a)光子のエネルギー(プランク公式):  $E = h\nu = h/T \rightarrow ET = h.$

(b)系のサイズが大きくなると、時間経過は緩やかに移行する。

反応速度 = 大重量/長時間 = 小重量/短時間 = 単位量当たり速度は同じ。

.....